

## 全労金2022春季生活闘争ニュース・第19号

～めざそう賃金改善！進めようジェンダー平等！団結しよう、みんなの春闘！～

3月11日は、「東日本大震災」が発生した日です。

被災地・被災者に寄り添う取り組みの継続を確認しあおう！

### ◎「東日本大震災」から11年、被災地の現状を知ろう

2011年3月11日14時46分、三陸沖の宮城県牡鹿半島の東南東 130km付近、深さ約24kmを震源とするマグニチュード 9.0・最大震度7の地震が発生しました。この地震による被害は、揺れによるものの他、津波によって様々な被害をもたらしました。

東日本大震災による被害は、死者15,900人、行方不明 2,523人、震災関連死 3,784人、避難者は47都道府県 913市町村に38,139人、となっています（※警察庁発表3月9日・復興庁公表2月8日）。

復興・再生に向けて、岩手県や宮城県の沿岸地域では、高台移転による宅地造成や災害公営住宅建設、自主再建により、2021年3月末時点で仮設住宅生活が解消されています。一方、福島県では、未だに33,365人が県内外に避難されており、避難生活が長期化しています。そのような中、2019年5月には、福島復興再生特別措置法の改正により、帰還困難区域内に、避難指示を解除し、居住を可能とする「特定復興再生拠点区域」を定め、双葉町・大熊町・葛尾村は2022年春頃、富岡町・浪江町・飯舘村は2023年春、に拠点区域全域解除をめざして、除染・インフラ整備等が進められています。なお、「特定復興再生拠点区域」外については、2020年代をかけて、帰還意向のある住民が帰還できるよう、個別に把握し、避難指示解除をめざす、としています。

被災地では、復興ステージに応じた切れ目のない支援が必要として、高齢者の孤立防止、新たなコミュニティ形成、生きがいつくり、被災した子どもへの学習支援や心のケア等が取り組まれています。

### ◎今も続く福島第一原子力発電所事故による影響

福島第一原子力発電所は、運転中であつた1号機から3号機が停止後の炉心の冷却に失敗したことで事故・水素爆発が起こつたと言われています。

現在は、2019年12月に改訂された「廃止措置等に向けた中長期ロードマップ」に基づき作業が進められているものの、2021年度には開始するとしていた燃料デブリ（事故により溶け落ちた燃料）の取り出しは未だ開始されていません（※第99回廃炉・汚染水・処理水対策チーム会合／事務局会議（2022年2月24日））。燃料デブリの取り出し開始か

ら廃止措置終了までに30～40年かかると示されていることを踏まえても、原発の廃炉にはまだ長い時間が必要です。また、原発事故による影響は、農林水産業に大きな影響を与えており、営農再開面積は震災前の38%、水揚量は震災前の18%となっています。加えて、福島県産品の風評被害は、未だ全国平均との価格差が存在している他、輸入規制措置を講じた55カ国・地域のうち、14カ国で規制が継続されています。そのような状況にも拘わらず、政府は昨年4月、核燃料冷却により発生した汚染水について、2年後を目途に海洋放出する方針を決定したことから、福島県では今後、再び風評被害が拡大するのではないかと懸念されています。

### ◎「東日本大震災」からの復興・再生に向けた取り組み

全労金は、東日本大震災発生直後から、多くの組合員の協力の下で様々な支援の取り組みを展開してきました。現在も「復興支援／福島応援セット」の斡旋販売に取り組み、全労金「復興・再生集会」を開催しています。

#### ① 労使共同カンパと物資支援

カンパは、全体で49,474,966円を集約し、被災された職員に配分しました。また、物資支援は、全労金単独で1回、労使共同で2回実施し、東北労金へ物資を届けました。

#### ② 東北労金の業務支援への人的派遣

労使共同の支援策の1つとして人的派遣を実施しました。派遣は、第1次（2011年4月18～28日）から第12次（9月26日～10月7日）まで継続しました。

#### ③ 連合救援ボランティア

連合救援ボランティア第4陣（2011年4月24日）から派遣を開始し、終了する第20次（9月18～24日）まで、延べ64名を全国から派遣しました。

#### ④ 福島除染ボランティア

福島市社会福祉協議会「除染ボランティア」に、第1次～第20次（2011年10月29日～12月11日）まで延べ47名が参加しました。

#### ⑤ 南相馬ボランティア

「南相馬市災害復旧復興ボランティアセンター（福島県）」と連携し、2013年10月から2016年11月まで、延べ238名の参加で取り組みました。

### ◎第9回中央執行委員会で、東日本大震災からの復興・再生に向けた取り組みの継続と、11年前と変わらぬ連帯・絆を確認しあいました。

